Death　at　morning　AND　night

鼎都

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｄｅａｔｈ　ａｔ　ｍｏｒｎｉｎｇ　ＡＮＤ　ｎｉｇｈｔ

【Ｎコード】
Ｎ９３３９Ｔ

【作者名】
鼎都

【あらすじ】
存在自体が相反している二人の人間。
朝と夜
光と影
日と月
陽と陰
生と死
彼らは唯一無二の相方であった。

対の存在意義は…何？

ハジマリ（前書き）

どうも、鼎都です。
いい加減…いい加減にしろ〜！！！！！とか言う人が…いるのでは？と…ちょっちドキドキしております；
一応…多分…今までに作っただけでは１００作は超えているのでしょうけど…
完結で来たのは“一作”もありません〔笑？〕
頑張ります…。多分。でも多分、頑張らないです…。
今、一番完結に近づいているのは「偽りの俺」です。
ＬａｓｔＧａｍｅは…放置プレイですね；
サイトの方も…

ということで、何となくＯ・Ｍさんが黒が好きというわけの分からない理由から「朝と夜」を想像し、対っておもろい？かも？という結論に至り新作が生まれたわけですが…

楽しめること〔自分限定〕を最優先に、“ついで”に楽しんでいただけたらな〜？と思いつつ始まります！
正直、読者さまに失礼！って感じですが…もー仕方ないんです…
他のことより楽しいことを求めているので；
では、どうぞ♪

ハジマリ

彼は“光”。
彼は“影”。

彼は“日”。
彼は“月”。

彼は“陽”。
彼は“陰”。

彼は“生”。
彼は“死”。

僕は“朝”。
俺は“夜”。

対の存在。
否。

対故に互いを引き立てる相方。
または相棒。
光の彼でも
影の彼でも
裏と表はある。

だからこそお互いが成り立っている。

彼はもう一人の僕。
彼はもう一人の俺。

誰も知らない、僕達の、俺達の関係。

優等生のお前。
不良の君。
そんなお前と

そんな僕の
渦巻く人の情が絡まり
様々な人が蠢く
学園で繰り広げられる日常の
物語。

The last story
「Death at morning AND night」

ハジマリ（後書き）

軽く、あらすじを流してみた形です。
では本編どうぞ♪

幻想を抱き夢を（前書き）

寝不足…

一番嫌いです…最近……人の話が…なかなか聞けずに…Ｚｚｚ…

幻想を抱き夢を

その日は、ある騒動から始まった。

騒動とは単純明快。

不良同士のぶつかり合いだ。

片方が、ガンを飛ばしたとかどうとかで、たまたま顔をそちらに向けていた不良少年に殴りかかったのだ。

しかし、喧嘩を売った相手を間違ったのか結果は惨敗。

そりゃあ、当たり前だろう…、と思った。

だって、喧嘩を売った相手が悪かったから。

「会長！また、夜月朔〔ヨヅキ　サク〕が暴れてます！」

「……はぁ…分かった。行くから周りの無関係の生徒には被害が出ないように対処しておいてくれ」

「はい！」

生徒会長は…いつから、職務に不良の喧嘩の仲裁役が含まれたか。
謎だ。

しかし、別にそういう決まりがあるわけではない。

“夜月朔”

こいつが関わるから、会長である僕が動く。
彼は学園一の問題児。一匹狼でいつも一人で行動している。
しかし、その身に宿す力は本物で群れをなし相手を容赦なく潰そうとする不良グループのど真ん中にいたとしても負けることはない。
負けること自体が彼の中にはない。
その身にあるものは影。

単なる暇つぶしに過ぎない。
彼はおそらくそう思っているであろう。

実際、この“僕”が思っていることだから。

「夜月、朔」

「会長じゃん。何、またヤんの？」

「仕方のないことだろう。貴様が周りに影響を及ぼす前に止めねばならんのでな」

「ま、いいか。今のところお互いイーブン。白黒決着つけんなら早

い方がいいしな」

「結果は知り得ぬもの。僕は勝敗を求めない」

か細い体に殴りかかる夜月朔。

その鋭く突き出された拳を難なく手のひらで流し、こちらもまた鋭い切れで蹴りを繰り出す。

生徒会長である、朝日望〔アサヒ　ノゾム〕。

彼のみに許された学園側からの特権。

問題児“夜月朔”に対抗するため、生徒会長“朝日望”のみ、夜月朔に向けての暴力行為を許可する。

早い話、夜月朔を退学とすればいいのだが学園長の暇つぶしのために退学にさせぬようにしている。

また、この騒動はほぼ日常としており生徒達を熱くさせる手段としてもとられていて、問題児である夜月朔も生徒会長である朝日望も周りから絶大な人気を誇っていた。

しかし、彼らには秘密がある。

朝日望
夜月朔

彼らは相反する性格だが、相反するこそで対の対象となり互いに認識しあえ、存在意義を作りだしていた。

生徒会長であり、学園の優等生の中の優等生、朝日望。
彼を漢字で表すとすれば、「光」「日」「陽」「生」。
そして、「望」と「朝」。

学園一の問題児であり、優等生とは全く違う存在の夜月朔。
彼を漢字で表すとすれば、「影」「月」「陰」「死」。
そして、「朔」と「夜」。

相反する存在は、自らを引き立たせ、また自らも相手を引き立たせる。
まさに釣り合い。

秘密。

否。

互いに共通を共有し、自分らの立場を利用し生きていく彼ら。

犬猿の仲と周りからは見られていても、彼らの中には切れぬ「縁」だけがあった。

幻想を抱き夢を（後書き）

対…対…対…

色の対…と言えばあなたはどちら派ですか？

1、白と黒

2、青と赤

因みに私は1です。

あ、でも2でもいいな～とか最近思ったりします…。

丁度そんな人〔男だけど、だからこそいい！〕たちがいたので…

Q、好きな色は何ですか？

↓男A　青

↓男B　赤

しかも

↓男A　人当たりのいい穏やかタイプ。誰とでも一応話せる。リーダーっぽい。信頼感あり。ルーズだけど結構きっちり。

↓男B　常に一人っぽい。一匹狼のノリ。もの静かでいつも仏頂面。Aがリーダーに対し、副の存在のくせして、ちょっち人あたりが悪い。

そんでAとB。

Ｂは他の人間とはあまり話さないけど、Ａとは話してたり。笑ってたり。
Ａは優等生〔実際頭がいい〕
Ｂは不良〔っぽい〕〔実際目つき悪し。Ａには多分学力が劣る〕

こんな関係の恋愛…おもしろそうじゃないっすか？
しかも、最近友達とＮＬ含めて、友達には内緒なんですがＢＬも混ぜて三角関係…四角関係…五角関係いっちゃえ☆みたいなことになっておりますｗ

男Ａ↓女Ａ
→　　←
男Ｂ　↑
→
女Ｂ↑男Ｃ

因みに、男ＡＢＣは友達、友人、親友、仲間。
女ＡＢも以下同文。
男Ａは女Ａが好きで、男Ｂは男Ａが好きで、女Ａは男Ｂが好きで、女Ｂは男Ｂが好きで、男Ｃは女Ｂが好き。
因みに、ほとんど妄想ですが、男Ａに関してはちょっち有りな話っぽいので聞いてみようかなとか思ってたり☆
おもしろそうですよね♪ニヤニヤがとまりませんの！

人の恋路に首突っ込むのもあれですが、その五角関係に入りたいというのも私の性！
実際入ってますｗ六角関係っすよｗ

こんな感じですｗ

鼎
←　男A↓女A
→　　←
男B　↑
→
女B↑男C

六角形かどうかはわかりませんが…いい関係だと思いません？
因みに私はちゃちゃ入れたいだけなので、自分は恋は放置ですw
ちゃちゃ入れつつ傍観者なのです☆

それでは、長い後書きまで見てくださいましてありがとうございます♪
また次回お会いしましょう～

噂は必然と偶然を呼び込む（前書き）

ネムネムＺｚｚ…

休みがありませんの；

明日明後日も一日中予定がつまっており…

課題どころじゃないという話；

でも小説は更新。

だって好きだもの☆

ではどうぞ～

噂は必然と偶然を呼び込む

――ねぇ、知ってる？あの方に、どうもね相方みたいな人が存在するらしいよ？

――まさか！あの方って、あの人でしょ？あるわけないじゃん……

――夜、街で見たらしいよ。いつも一人のあの方が仲良さげに歩いてるのを。それも結構な美人だって

――え、女性なの？

――さぁ。判別がつかないくらい中性的で……

「煩い。何の騒ぎだ」

「会長知ってます？」

「興味ない。そもそもお前らが何故、落ち着きを見せないのかすら理解しかねる」

「噂ですよ。何か数日前にあの学園一の問題児の一匹狼、夜月朔がむーっちゃ綺麗な美人さんと仲良く歩いてたって。しかもしかも！目が合った通行人に殴りかかろうとした夜月をその人は名前を呼んだだけで止めたとか！有り得なくないですか！？あの喧嘩っ早い夜月朔が途中で、しかも殴らず喧嘩を止めたんですよ！？まさに、死神使い！ってか夜月を犬と例えてご主人様みたいな？もしかしたら夜月朔の大切な人なのでは！？と話のネタにつきないほどに話されてますからね！会長も気になるんじゃないですか？？僕はもーその人がどんな人なのか見てみたいっていう興味の衝動にかられてまともに授業受けてられませんからね！そんなことしてるんだったら情報収集をしていたほうがいいという結論に至るわけですけど、僕が動けばまた騒がしくなりますからね！動けずにいてむっちゃうずうずしてるわけです！」

「興味ない。そんなことで頭を使っているのであればさっさと仕事をしろ」

生徒会長、朝日望は同じく生徒会の役員である橘蒼衣〔タチバナアオイ〕のヒートアップしていく話を軽く受け流し黙々と己れの職務を真っ当していた。

エリート中のエリートで、成績はいつもトップ。
運動も並外れた能力を発揮し、部活からの勧誘も日常茶飯事にあった。

それでいて、クールで美人でカリスマ性に長けていると謳われる学園の象徴、生徒会執行部長。

人気は絶えず衰えず、無愛想なところでもそれがまた人気の秘密となっていたりしていた。

しかし、それはあくまで“表”の顔。
決してそれが偽りとかというわけでなく、実際の顔なのだが、彼には秘密がある。

表の顔が存在すれば“裏”の顔も存在するわけで、彼には表とは真逆に裏があるのだった。

「はっ…久しぶりだな」

目の前にふっと沸いて出た男を鼻で嘲笑うように笑った。
男もその姿を目にしニヤリと口端を持ち上げた。

「全くだ。テメェはいつも多忙そうでちっとも遊べんからな」

「それは悪かった。だが、一応時間を作ろうと頑張ってるんだ。理解してくれ」

「当たり前だ。俺との時間を作ろうとしないなんて有り得ない」

「自意識過剰」

「愛故だ」

プッと吹き出す彼ら。
そして、再びお互いの存在を確認するように見つめあい不敵な笑みを浮かべ…

「新月」

「満月」

相手の二つ名と呼べる名を呼んだ。

「「発動」」

そう、決めながらも二人は笑い、暗い暗い闇夜を楽しそうに足を進める。
彼らが進む先には大きな騒動が待っている……というよりかは、彼らが騒動を起こしていた。

学園一の不良問題児で一匹狼の夜月朔は「新月」として夜の街を徘徊し、強い相手を求め幾度、永遠に彷徨う。

そして、その相方「満月」として「新月」ともに在る存在。彼もまた強い獲物を求め夜を彷徨う。

そんな彼こそが学園の象徴と謳われた「朝日望」であることを夜月朔以外知るよしもない。

噂は必然と偶然を呼び込む（後書き）

まぁ…当然の結果ですわね。〔あれ？〕

そもそも、無謀なことをしでかそうとする私がいけないのです。

一作も完結したことがない。しかも、１００作近く、または以上作っておいて。

有り得まして？

まず、この口調からして有り得ませんわね。

あーやだやだ。汚らわしい。〔何が？〕

調子に乗るのもいい加減になさい。〔だから何が？〕

……はい。いい加減にしましょうか。

何となく主人公〔朝日望〕の優等生クール口調の変化により自分の文調っていうんですかね？も変化しているようです。

因みに一応素で書いてました。

後書きの最初。

まぁ結局は何だって話なんですけどねｗ毎回同じパターンｗ

では、次回お会いしましょう～ノシ

時に流れは人によって支配される（前書き）

…

あー

新作書きたい↑

ネタが

膨れて

膨れて

膨張

ボン

バン

どーん★

書きたいよー！！！

これ、短篇！

短篇！よし！短篇だよ！決まり！

ということで強制終了★

時に流れは人によって支配される

「対」

「相対」

「謎」

「否」

「肯定」

「否定」

「は？」

「だぁから、お前ん家、久しぶりに行っていいか？」

「いや、寮に帰らねぇと門限もうすぐだし。そもそも、会長が今この時間に校外を出ている事自体回りから注目されんだよ。理解？」

「チッ」

「はぁ……」

相対する存在。
それは表。

裏。
彼らは同じ。影を、闇を、暗闇の中に生まれる人工の光、月光を遮るビル影の闇の中。

そんな暗く、闇に、華やかな空間と静寂、時偶怒声、鈍い音に支配された空間に蠢み生きつづける存在。
互いになくてはならない存在。

光と闇。

闇と闇。

どちらかが欠ければ表は光に包まれる、または闇に覆われる。
どちらかが欠ければ裏は闇が薄らぎ、華やかさに欠陥が。

二人の小さな存在。

存外大きく、人の中に、心に侵入しているのかもしれない。

「さようなら」

それはまた会うための約束。

生きていればまた出会いはある。

死に与えられるものは無。

消えた存在は、小さく儚くも、大きく絶大な存在。

彼のココロには響いた。

絶望。

無くなった対。

「何故……消エタ？何故、置イテイク？」

時に泣き
時に笑い
時に怒り
時に悲しみ
時に嘆き
時に無関心へ
時に遙かを

彼を支配したのは“存在の無”。

そして

回りの人々は
その者の感情によって支配される。

その存在はあまりにも大きく
あの存在は絶大に誇りを抱き
長い長い、華やかな歴史に
短くも長い静寂の幕を開ける。

たかが一人の欠陥に
これほどまでに周囲を鎮める存在はあるだろうか？

時に流れは人によって支配される（後書き）

……

ねむい…

あー就職…

考えないと…

選択

選択

選択

強制終了って面倒？

ってか、ほぼ流れw

全部流れw

笑笑笑笑笑笑笑

にしても笑ったb

腹痛い！〔腹筋の酷使。腕の酷使；〕

多分、あと1…2…3くらいで終わるよ！

新作書くために頑張るよ！

遙か時を待つごとに感情は深く堕ちる（前書き）

強制終了…は…今までにやったことは…あった？

多分…疑問形；

まぁ、流れ、感情、空気、雰囲気、気分、睡魔〔あ〕…で決まりますから…

そのときのできはその時の→の配分次第ですわw

遙か時を待つごとに感情は深く堕ちる

『後悔先に立たず』

「まさに…そうだな…」

偶々目にしたその文字に、かなりの体力を消耗する。

何故かは、ある出来事からである。

その日の校内新聞のトップ一面を飾ったのはある事件と称される皆から反感を買う内容だった。

【　生徒会長の消失　】

ふと見れば、生徒の目が惹かれるタイトル。

そして、その次に述べられた事実。

「我々、新聞部は当学校生徒会長である朝日望にある日、密着取材

を頼んだ。さすが会長。されど会長と言ったところか。簡単には首を縦に振ってはくれなかった。そんな時、我々と会長とのやりとりを見ていた他の生徒会役員が我々に加担し見事、説得をしてくれた。

そして、その日、その時から我々の密着取材は始まった。

朝は午前5時起床。寮の部屋にて自炊で朝食を食べては、お弁当を作り、夜のうちに支度をしてあったカバンを持って、普段の姿で登校。朝が早い割には、他の事は普通である。

教室に着けば、読書を始め、ＨＲが始まるまでそれは毎日の決まりとして行っているという。

因みに、会長の図書館使用率は校内トップである。〔新聞部図書館利用者数及び利用数調査結果より〕

そして、それは起こった。

密着取材3日にして、会長は忽然と姿を消した。

我々は、寮の部屋の前で前日までと同様に朝４時半から待っていた。しかし、幾ら待てど登校時間になっても会長のその部屋のドアが開くことはなかった。物音すらしないのだ。

これは明らかに可笑しいと分かり、寮監に許可を貰い部屋に入った。白。ところどころ黒。そして静寂。我々に感じられたのはそれだけ。ただの部屋として或る空間。

そこで、我らが会長が住んでいたはず。そう、“はず”なのである。ある程度の生活空間として与えられたその空間には、まるで今まで誰も暮らしてなかったかのようにただただ静かな無があるだけだった。匂い、色彩、生活必需品、部屋の家具まで。総てが使用された痕跡すらなかった。ただ、申し訳程度に掃除されただけ。部屋の管理をする不動産屋の職員が掃除をしたかのように。

我らはこれらの出来事を纏め、結論を導き出そうとした。されど、幾ら思考を巡らせど会長自身に起こったことではないと思うしかなかった。

恋人という存在どころか、恋愛感情、人への感心があるのかどうかも分からぬ会長。
思い返してみれば、今までに会長についての人との交流に関した噂が流れたことがなかったという事実が突きつけられる。存在は“会長”という役職だけで浮き、後は何もない。“会長”という存在だからこそ、“優等生”という立場、学年トップという立場があり得るという我々の考えに比例し、会長＝優等生＋学年トップという方程式が成り立っていた。
つまりは、会長である“朝日　望”は会長であるからこそ在って、ただ単なる“朝日　望”、個人そのものの存在は無かったということになる。
相反する存在がいる中で、唯一の相棒を失ったような感覚とでもいうのだろうか。
“夜月　朔”に、会長の件について聞いてみたが、本人は至って嬉しそうに「消え去って晴々した」と、単刀直入にその言葉を紡ぎ出し、見たことのない笑顔が我々の顔を覗いていたのである。普段、畏怖の存在として恐れられる夜月　朔が笑顔を見せたのだ。これほどまでに強烈な不吉の予兆はあっただろうか？実際、我々がこれを述べている時点で身に危険が迫っているのは確か。密かに身を隠しつつ、我々は再び、会長について調べることにした。

ここで、我々は求める。
会長についての有力情報を手に入れた生徒は我々の判断次第で、賞金の贈呈をする。有力情報をご提供ください。
そして、ここに我々は今回の生徒会長消失事件を“光の消失”事件と名づけることを記す。

新聞部部長」

「バカバカしい」

生徒の騒動を揺るがす一枚の新聞。
その紙をじっと見つめながら、夜月朔は思う。
消え去った存在の大きさはとてつもなく巨大なもので、塞ぎようのない穴がぽっかり。
そこからは今までの思い出という思い出が絶えず流れ出ているようで、何も考えられず、ただ目の前の真実が信じられずにいた。
つい一昨日まで相対し、協調していた存在。

生を知ること。
死を教えること。

彼と笑い、叫び、泣き、悲しみ、学んだことが総て、消え去りそうで、すでに流れ出ていて、思い出そうとも思い出せぬ自分の状況すら掴めず、真実か否か、簡単な質問ですらＹｅｓ　ｏｒ　Ｎｏで答えられるか曖昧な思考だった。

愛。

嫌。

情。

総てが、存在の消失とともに、深い深い井戸の底へ堕ちた…否、堕ちていってしまった気がした。

遙か時を待つごとに感情は深く堕ちる（後書き）

秘蜜。

はう！

綺麗過ぎる…

三大悲劇は最高っすよ♪

では、多分、あと、1回か、2回か、3回くらいで終わります！

空を見上げれば君も見ているのだろうか（前書き）

はうあ！

何か、ちょっち詩みたいな
変なページっすよ！
まぁ…一種のページ稼ぎっすかね？w

空を見上げれば君も見ているのだろうか

始まりは煌々とした白

少々の時間を経て、薄く、淡い黄へ

次第に染まりつつそれは　蒼　青　へと

蒼天

うっすらと白みを帯びた天に

白き光

黄で煌めき

人々の道先を照らす日

どこにいても

その日は

そこに在る限り

人々を

道筋を

景色を

見せ

魅せ

照らし

幻想を映し出す

そこから暫し

堕ちれば

待ち構えるは

闇

怖

暗

恐

されど

人は

作る

華やかな

街

店

道

染まることを嫌い
それでも闇を作り出す
そこに新たなる光
淡く
黄金に
儚くも
美しく
柔らかな

一つの光

わずかな光

灯

そんな光が頼り

群青

紅蓮

猩紅

七彩

一つの大きな

広大な

壮大な

存在の

「キャンバス」

に

彩られる

無限の“色”

その絵

出来上がり次第に

人々の目に焼き付かせる

途轍もなく

大きな

大きな

大きな

圧倒される

存在

永遠の時を消費するのは愛の力で出きること（前書き）

……

ドロドロ

グチャグチャ

ベチャッ★

あう…

愛を知りたい

恋を知りたい

……

きゃうん！

恋も愛も知らない子って可愛くないっすか！？

それに付け加えて、感情！

純粋無垢な子は大好きです！
ヤンデレっ子も大好きです！
天然おとぼけも大好きです！
俺様はかなげも大好きです！
つまりなんでも大好きです！
雑食なんっすよw

永遠の時を消費するのは愛の力で出きること

消失から早くも…一年。

未だに、学園の伝説として名高い会長消失事件の噂は全校生徒の心のうちにあった。

生徒どころか、

教頭レベル、校長レベルの者でさえ知らない。謎の失踪。

知りうるものは恐らく理事長のみ…といったところか。

「何処いったんだよ」

毎日そんな言葉をこぼしていた。

「会いたい」

毎日そんな告白をしていた。

「死にたい」

毎日そんな宣告をしていた。

「お前のいない世界はつまらなさすぎる」

手元から離れてしまったとても、とても大きな存在。

空白。
穴。
空欄。
白紙。
無。

会うことを望みながらも諦める。

探し出すという意志を呟くも諦め。

愛を言いつづけるという思考も絶える。

辛いことに逃げたくなり宣告する。

「バカだな」

そう。
あいつならそう言う。
絶対に。
あいつは絶対に。

「気づけよ。バカ」

幻でもいいから、夢でもいいから、会いたいんだ。
屍でもいいから、生きてなくてもいいから、愛を呟きたいんだ。
どんな姿でも、どんな存在だとしてもいいから、探しだしたいんだ。

君が生きていると知りたいけど、もし死しているのならば死にたいんだ。

君に気づけない俺は何とも愚かなのだろうか。

「テメェは俺のモノだろ？俺もテメェのモノだ。勝手に死ぬことは許さねぇ」

俺は…死んだ……？

「何をほざいてる。さっさと顔洗ってこい」

再び訪れた平穏？

それともこれは夢？

幻聴。

眠い。

デジャヴ…じゃねぇや。

何だっけ。

ああ、幻覚…

「いい加減」

風を切る。

そう、得意…ゲホッ！！！！！！！！！！！！！！！！！

「ガハッ！ゲホッ…っ！！！は！？」

噎せ返り、吐き気を催しつつも現状を理解しようとフリーズ。

それでも、思考は回らず、人、怒気、笑。

「いつまで寝ている気だ？ああ？ボケ朔」

それは、夢か

死んだのちの儚い夢か

それとも幻か

信じたいのは

現実

「の…ぞ、む？」

「何だ？人をお化けでも見てるかの様な目でみんな」

永遠の時を消費するのは愛の力で出きること（後書き）

…あれ？

巡らぬ先に想い届かず思想の理想は桃源郷へと堕ちる（前書き）

てってれてってってー★

終わっちゃえ★

ということで、明日〔7月１０日〕は暴走して参ります♪

ってか…7月7日。

七夕祭りしよーぜ！しよーよ！

……ＳＳが書けないことに今更…認識する鼎都です…

では最終話かもしれない話です。

巡らぬ先に想い届かず思想の理想は桃源郷へと堕ちる

「さようなら」

それは　再び　出会うための　約束

誰かが言った

それは　また出会うための　挨拶

僕は思う

それは　時に残酷で　時に灯火を

光さす　目標の　言葉

誰もが　胸に染み付け　離れること無き言葉

「ただいま」

それは　再び会った時の　挨拶
彼は思う　時に残酷だとしても　嬉しきこと
君に　と　出会えた奇跡　幸せ
例え　それが　たった数日のこと　だとしても
再会　会える　ことに意味有る
胸に染まり　締め付ける　言葉
嬉しさ極まりなく　涙じみて　苦しくさせる
それが聞けること　幸福

「は？」

「だから、一年の留学、つまりはホームステイだ。イギリスにいっ

てたんだ。ただ、お前に言えばどうせ言うこと聞かずにこっち来るだろうし、うるさいだろうし、連絡すれば面倒な事になるだろうしで言わなかったんだ」

「それで、校長たちにも言ってなかったんだよ。お陰で失踪何ていうおもしろい噂が広がってるじゃない。作戦成功ってね」

「……」

呆れて言葉が出てこない。
確かに、自分は望に関して、海外に行くといえば行くかもしれない。死ぬといえば死なぬよう監禁して意志が壊れようとも死にたくないようにちょーｋｙピーするかもしれない。または自分でいっぱいになる様に殺すかもしれない。
だけど、それが俺の愛だ。
愛故の行動。別に避難されるいわれは無い。
俺様、横暴、傲慢と言われようとも俺は俺、あいつは俺のモノ。俺もあいつのモノ。

「……帰ってきたときが一番酷いというのは考えていたが…まさか、この狂犬が泣くとはな…」

「うっせぇよ！テメェが音信不通でそのまま1年も失踪してたんじゃ俺はどう生きてきゃいいんだよ！って必死こいて考えて……あー！！！クソ！！！！！望…テメェ覚悟しろよ！！？？」

「……ぶっ潰してやるよ」

「こっちの台詞だ！！」

「まぁ、仲良くて良かったよ。帰ってきた途端に喧嘩が始まっちゃ大変だったからね」

理事長は簡単にそう言うが、仲がいいというよりかは喧嘩のしすぎで互いに存在を認めてしまい、そして互いに染まりつつある関係…と言った方がもっともらしいだろう。

表の姿に過ぎない彼らだが、互いの存在意義は絶対。

彼らは彼ら、各々が存在してこその在り方。

必要不可欠。

一生の相棒。

「いや…多分、明日には業者を呼んでおいた方がいいのかもしれませんね。この後、グランドに鋳入るかもしれません。朔は爆発させるのが好きですし、無駄に力が強いですからね。地面割るくらい普通ですから」

「……頼むから、部屋一つで収まってくれ」

「残念ながら最低でも講堂館〔１ｈａ〕は必要かと」

「止めてくれぇえええええ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

理事長の悲痛な叫び声が上がれば、朔と望は目を合わせ小さく笑う。

朔が存在を失ったように
望も存在を失った生活に満足いっていなかった。
理事長の命令…という傲慢な手段。朔に言い、来てくれるのは嬉しいことだが途中の街中、飛行機などなど様々なところで問題を起こされても困るため言わなかった。
しかし、この1年。
どれほど、その存在を確認しようか手紙、メール、電話をしようとしたか。

平気な顔をしていた望もまた、存在意義を持ち合わせなければ存在する理由が無かったのかもしれない。
死を考え、愛を求め、姿を探し、心を認め。

「永遠など有るものか」
「俺らの」
「愛以外…くさくね？」
「いいじゃねぇの。俺らの存在意義」
「俺らの生涯」
「永久｛トワ｝」
「永遠｛エイエン｝」

「永久（トコシエ）」

「永遠（トワ）」

「永久（エイキュウ）」

手を　決して　離さないで

繋いだ

愛　を捨てないで

求める　姿　形　存在

失ってからでは

総てが

遅い

だから

求め　認め　探せ

愛　あるならば

そこに

苦痛は　　皆無

「「　Ｌｏｖｅ　ｉｓ　ｅｔｅｒｎａｌ．　ｆｏｒｅｖｅｒ．

Ｔｈａｎｋ　ｙｏ

u

F
i
n

巡らぬ先に想い届かず思想の理想は桃源郷へと堕ちる（後書き）

あ、終わったw

Ｆｉｎって、つけるの夢でした♪

始めて…強制終了ですが…終わりました！

結構満足行ってます！

ってか、暴走欄多いな；

詩っぽいものは総て鼎都の暴走ですw

そうでしか書けませんから…

ちなみに、この小説のタイトルは得に意味ありません。

メインもサブも

うん。ただの流しだよ★

では、次回作をお楽しみに…？

こんな駄文を最後まで呼んでくださいました皆様、ありがとうございました！

それではまたいつか、…更新の時に会いましょう♪

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9339t/

Death at morning AND night

2011年10月6日13時56分発行